

## P-Fスタディ母—子場面における 母親の期待水準に関する比較研究

藤 田 主 一

Rosenzweig の創案によるP-Fスタディ(Picture-Frustration Study)は、パーソナリティ・テストの中でも投影法(projective method)に属する一種で、日常生活場面において誰もがごく普通に経験する24種類の欲求不満場面によって構成され、対象者の主観的な反応からその力動的な人格像を探ろうとするものである。P-Fスタディは、広く臨床的に使用されると同時に人格理解の用具としての有効性を高めているが、絵画刺激と言語刺激が外的に提示されていることから、かなり状況決定因(situational determinant)が強く、そのために反応の自由度が低くなることも事実である。

近年、P-Fスタディ研究に新たな展開が認められるようになったが、それはより深い人格理解の追究を目的にして、従来の標準法に依拠する以外に新たな手続きを加えようとするものである。筆者らは、場面展開性という観点から標準法以外の施行方法を検討している(高橋・藤田1985, 藤田・高橋1985)。それは、P-Fスタディの1場面に4こまの場面展開という枠組を与えてお話を作らせることにより、対話内容がどのように展開されて行くのかを明らかにしようとしたものである。具体的には、1場面を4こま漫画に似て横に4個並べ、2こま目からは登場人物の吹出しの部分の両者とも空欄にした場面設定を与え、その展開過程と終結結果から対象者の人格の力動的な側面を捉える方法である。筆者らのこれまでの研究では、標準法では予想し得ない日常の行動様式や対人場面における他者認知、さらに両者の役割期待などが生き生きと再現されとともに、欲求不満の解決展開に一定のパターンのあることが見い出され、臨床的にも意味のある知見が示されている。

このような研究の背景は、P-Fスタディの刺激構造や場面特性に関する優れた研究成果(一谷・林1976, 秦1981など)に負っているが、同時に、1場面1反応ではいわゆる意見水準(opinion level)を表明したり、安易にその場限りの反応をしてしまう対象者の心理状態に関心が向けられたからである。思わぬ欲求不満事態という外的要請を受けて、幾分戸惑いながらも対象者は解決のために豊富な対応の仕方をまとめなければならないため、対象者によってはその場を回避したい衝動から安易な回答をしてしまうことも無理からぬところであろう。実際、真の内的照準に合わせた反応をせずに、期待照準に沿った常識的な対処の仕方を採用してしまうことも納得される。即ち、それは反応に先行して考えた事柄をそのまま記述する場合のほかに、反応を抑制し

敢えて表出しない場合の存在を意味するものであるが、別の角度からすれば考えもつかない内容や実験者側の操作によって意識化される内容も存在することと思われる。筆者らは、このような対象者に内在する多様な反応を分析する目的で、児童用マニュアル評点例に記載されている例文を言語刺激にし、それを子どもの反応として同意するか否かをGCR(Group Conformity Rating)項目12場面について評定させた(藤田・高橋1984)。その結果から、標準法では同一評点と見なされる刺激文に対しても選択率が異なったり、また一般にGCR%には算入されない評点に高い支持を与えている点など、対象者の外見水準ではつかみ切れない反応の多様性が確かめられている。

こういった研究方向に継続して、場面認知の相違による反応水準の効果を研究することは、大変重要な課題である。所与の欲求不満事態と現実経験との類似性はその反応に影響を与えるだろうし、欲求不満を生起させた相手を誰と認知したかによっても反応の意味は異なってくる。たとえば、原野・江川・渡辺(1970)は、親や一般人が欲求不満の原因になる時は教師が原因になる時よりもはるかに外罰的態度を示すことを明らかにしているし、また、秦(1974)も相手を家族と認知する場合は相手を他人と認知する場合よりも外罰的の反応を示し易いことを指摘し、人物認知と言語反応とを比較しながら検討する必要性を強調している。本研究は、上記の知見を踏まえて特に母—子関係に焦点をあてることを試みた。P-Fスタディは対象者自身の反応水準を問題にするが、実際、子どもの母親に対する反応と母親の子どもに対する役割期待とがどの程度一致するのかを検討することは興味深い。ここでは、母親の眼を通しての子ども像、子どもの欲求不満に対する対応方法や、あるいはまた子どもに何を期待し何を期待しないのかといった役割期待の方向差を検討すること、加えて日常の母—子関係の具体像をP-Fスタディの場面から明らかにすることを目的とする。

## 方 法

### 1. 調査対象者

調査対象者は、埼玉県内に在住する母親81名である。調査実施時の平均年齢は37.96歳(30~52歳)であり、全対象者の約78%は30歳代であった。また、平均子ども数は2.11人で、子ども数2人が全体の約68%を占めている。

### 2. 調査材料

P-Fスタディ児童用24場面の中から、絵画刺激と言語刺激の内容および従来の研究報告を考慮して、母—子の対話場面と想定される10場面を選択した。各場面とその言語刺激は以下の通りである。

- 場面1 「お菓子は兄さんにあげたから、もう1つありませんよ。」  
 場面4 「困ったわね。その自動車私には直せないわ。」  
 場面7 「あなたは悪い子ね。うちの花を摘んだりして。」  
 場面10 「悪いことをした罰に、押入れに入れて悪かったね。」  
 場面14 「そんなところに隠れて、何をしているの。」  
 場面15 「けがはしなかったかい。」  
 場面16 「あなたのボールを取ったりして、この小さい子はいけないわね。」  
 場面17 「出かけるから、寝て留守番しててね。」  
 場面19 「また寝小便したのね。小さい弟よりだめじゃないの。」  
 場面23 「おつゆが冷めてしまって悪かったわね。」

上記10場面のうち、場面1、場面4、場面10、場面15、場面16、場面17、場面23は自我阻害場面、残りの場面7、場面14、場面19は超自我阻害場面である。また、場面7、場面10、場面16、場面17、場面19には社会的適応性を見るGCR評点が設定されている。

### 3. 手続き

調査は集団で実施し、その基本的な手続きは通常の標準法に準拠しているが、記入に際してここでは特に3種類——①一般的な答え、②母親が期待する答え、③母親が期待しない答え——の回答欄を設け、母親自身に率直な回答を求めた。具体的な教示の概略は次の通りで、例題を用いて説明された。

左の絵をご覧ください。「あなたの書いた絵あまりじょうずではないね。」と母親が子どもに話しかけているところです。この子どもは普通どんなふうに答えるでしょうか。子どもが答えると思われる言葉を①の欄に書いてください。それでは母親はどんな答えを望むのでしょうか。母親が期待する答え（こんな答え方をしてくれたらいいのに——）を②の欄に書いてください。最後に、母親が望まない答え（こんな答え方をしたら許さない——）を③の欄に書いてください。思いっくままでけっこうですから自由に書いてください。

教示終了後、場面1から順次記述を求めたが、母親から①と②、あるいは①と③が同一内容の可能性のあること、ならびに3種類の異なる答えを書かなければならないのか等の質問がなされたので、いずれの場合もすべて自由である旨を伝えた。

## 結果と考察

母親から得られた一般的な反応水準、期待する反応水準、期待しない反応水準の記述内容は、P-F スタディ児童用日本版（住田・林・一谷1964 a, 1964 b）に依拠して評点ならびに解釈が行

なわれた。なお、ここでは全対象者の評点因子と評点カテゴリーの出現率を場面ごとに算出したが、その過程で評点不可能あるいは誤認回答等は「その他」の反応として一括評点した。以下、場面ごとの3水準の評点結果を基に特徴的な諸点について考察する。

### 場面1

場面1は自我阻害場面で、子どもが母親から一方的に「お菓子は兄さんにあげてしまった」ことを言い渡される場面である。Table 1は評点因子の出現率を、Table 2は個々の評点を攻撃方

Table 1 場面1における評点因子の出現率(%)

評点因子	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準
E'	31.41	0.74	12.07
E	48.08	0	63.80
e	11.54	13.24	14.66
I'	0	0	0
I	0	0	0
i	1.28	0	1.72
M'	0.64	5.88	0
M	0	2.21	0
m	4.49	76.46	6.03
その他	2.56	1.47	1.72

Table 2 場面1における評点カテゴリーの出現率(%)

評点 カテゴリー	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準	$\chi^2$ 検定
E%	91.03	13.98	90.53	***
I%	1.28	0	1.72	
M%	5.13	84.55	6.03	***
O-D%	32.05	6.62	12.07	***
E-D%	48.08	2.21	63.80	***
N-P%	17.31	89.70	22.41	***

\*\*\*  $p < .001$

向と反応型に分類してまとめたものである。欲求不満に対する基本的な解決様式として、母親は子どもが一般に外罰的反応をする傾向が非常に強いことを認めている。なかでも欲求不満事態を強調する外罰的障害優位反応E'や、母親の不平等な扱いに「兄さんだけにあげてずい」「なんでとっておいてくれなかったの」「どうせお兄ちゃんの方が可愛いのでしょ」と非難・攻撃する外罰的自我防衛反応Eが多い。さらに「早く私のも買ってきてよ」といった欲求不満事態を母親の行動により解決しようとする外罰的要求固執反応eも出現する。これら母親の見方は、標準法による子どもの多数反応と一致傾向にあるが、同時にそれらの外罰方向は母親が全く望まない反応であって、これは子どもの解決方法がそのまま母親の期待する方向と一致していないことを意味する。

母親が子どもに期待感を持つのは無罰方向、特に時間的な経過や社会的規範に従うとされる無罰的要求固執反応mに出現しやすい。このm反応のなかでもその内容を確認すると、「今度から私にも残しておいてね」といった反応に50.0%の高い期待を寄せ、「我慢する」17.7%が続く。また、この期待する反応水準にe反応が認められるのはm反応との組合せ評点「ほかのものを頂戴」の結果で、母親にとってこの応答は“兄と同じものでなくても我慢するから——”という順応への努力の意味を含めて捉えていると思われる。内罰方向がほとんど出現しないのも特徴のひとつである。このように、場面1では母親が期待する子どもの反応水準は無罰方向であり、通常

に表明すると考える外罰方向は決して期待している反応ではないようである。

#### 場面 4

場面 4 は自我阻害場面で、子どもが母親から「私には自動車が直せない」と困惑を示される場面である。Table 3 は評点因子の出現率を、Table 4 は個々の評点を攻撃方向と反応型に分類し

**Table 3** 場面 4 における  
評点因子の出現率(%)

評点因子	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準
E'	11.69	1.33	1.45
E	11.04	0	27.54
e	65.58	42.67	39.13
I'	0	0	0
I	0	4.00	0
i	6.49	45.34	0
M'	1.30	0	1.45
M	1.30	1.33	1.45
m	0	5.33	0
その他	2.60	0	28.98

**Table 4** 場面 4 における評点カテゴリーの出現率(%)

評点 カテゴリー	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準	$\chi^2$ 検定
E%	88.31	44.00	68.12	***
I%	6.49	49.34	0	***
M%	2.60	6.66	2.90	
O-D%	12.99	1.33	2.90	**
E-D%	12.34	5.33	28.99	***
N-P%	72.07	93.34	39.13	***

\*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

てまとめたものである。欲求不満に対処する基本的態度として、母親は子どもが一般に外罰的反応、なかでも母親あるいは第三者に解決を依頼する外罰的要求固執反応 e をとり易いとする。これは標準法による子どもの多数反応と一致する。期待する反応水準は外罰方向と内罰方向の反応がほぼ等しく出現し、それは e 反応と子どもが自発的な努力によって欲求不満を解決しようとする内罰的要求固執反応 i に集中する。一方、母親が期待しない反応水準は外罰方向、e 反応や母親を非難・攻撃する外罰的自我防衛反応 E に向けられている。対照的に、内罰方向を望まない母親は 1 人も見られない。E 反応は「お母さんは不器用だね」「ダメなママ」「お母さんは何も出来ないんだね」のように、母親自身の自我が傷つけられることへの反発や、子どもからその非難や攻撃を受けるのではないかと不安への防衛反応からのものである。

さらに、場面 4 で特徴的なことは、評点上は同一に判断されるが、3 水準にはっきりと分かれる反応が存在することである。それは e 反応への母親の解釈の相違である。具体的には、「今直して」「お父さんに直してもらおう」「新しいの買って」が典型例で、評点だけでは表面的な解釈に留まると思われる。子どもは母親や父親に依存するが、母親もまた父親に依存し母親自身へ責任がかかるのを回避しようとするらしいのである。なお「新しいの買って」と同時に「捨てる」に関する反応が期待しない反応水準の中かなり認められたが、合致した評点分類が困難と思われたので「その他」として評点した。以上のように、期待する反応水準における i 反応の高さを合わせて考えると、母親の理想も、また子どもの現実も「お父さんに直してもらおう」ことへの期待であり、「自分で直してみる」ことへの努力であると思われる。そして、母親は壊れた自

動車を簡単に捨てて、新しいものを買わせようとする子どもの社会的成熟度の低さを心配するのであろう。

### 場面 7

場面 7 は超自我阻害場面で、子どもが母親から「花を摘んだ」ことを叱られている場面である。Table 5 は評点因子の出現率を、Table 6 は個々の評点を攻撃方向と反応型に分類してまとめたものである。欲求不満に対する基本的な解決行動として、母親は子どもが一般に内罰方向、

Table 5 場面 7 における  
評点因子の出現率(%)

評点因子	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準
E'	0	0	1.09
E	10.40	0	71.75
e	1.95	1.45	9.78
I'	5.19	5.80	2.17
I	81.16	73.90	8.69
i	0	17.40	0
M'	0	0	0
M	0	0	0
m	0	0	0
その他	1.30	1.45	6.52
<hr/>			
<u>E</u>	10.40	0	39.14
<u>I</u>	75.97	43.47	6.52
<u>E+I</u>	86.37	43.47	45.66
<u>E-E</u>	0	0	32.61
<u>I-I</u>	5.19	30.43	2.17
<u>M+I</u>	75.97	43.47	6.52

Table 6 場面 7 における評点カテゴリーの出現率(%)

評点 カテゴリー	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準	$\chi^2$ 検定
E%	12.35	1.45	82.62	***
I%	86.35	97.10	10.86	***
M%	0	0	0	
O-D%	5.19	5.80	3.26	
E-D%	91.56	73.90	80.44	*
N-P%	1.95	18.85	9.78	**

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\*,  $p < .001$

特に自分の失錯行為による非を率直に認めて謝罪する内罰的自我防衛反応 I よりも、弁明的な言い訳を付加して自我を弁解する超自我因子 I 反応に集中しやすいと考えている。GCR 評点は I 反応を加えた I 反応であるから、標準法による子どもの多数反応とともに母親の見方はこれらと一致している。一般的な反応水準に、徹底した償いやその目標への努力を意味する内罰的要求固執反応 i は出現しなかった。母親は、子どもが超自我の非難を受容できず「だって——だから」という形で一応の言い訳により自我を守っているが、これは母親が期待しない反応水準とは異なるようである。つまり内罰方向ではなく、母親は攻撃的に自分の行為を否定したり、母親に反発したりする外罰反応をむしろ好ましくないものと感じている。

一方、母親が子どもに期待する応答は一般的な反応水準に接近したものである。一般的な反応水準が自己弁明に圧倒的に多く「ごめんなさい」と素直に謝罪しない点に特徴が認められたが、期待する反応水準では I-I 反応が増加している。ただ興味深いことは、この自己弁明が母親によって全く否定されているのではなく、むしろ反応語によっては I 反応を好ましく受け取る点で

ある。I 反応を詳しく調べてみると、母親が期待する中の多くは「きれいだから部屋にかざる」「お母さんにあげようと思う」といった反応語で、言い訳であってもいわゆる女子らしい対応に、母親は肯定を示すらしいのである。

### 場面10

場面10は自我阻害場面で、母親が子どもに「悪いことをした罰に押し入れに入れた」ことを詫びている場面である。Table 7は評点因子の出現率を、Table 8は個々の評点を攻撃方向と反応型

Table 7 場面10における  
評点因子の出現率(%)

評点因子	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準
E'	20.83	0	4.90
E	18.33	0	77.45
e	5.00	0	0
I'	0	1.54	0
I	28.33	68.46	0
i	14.17	27.69	0
M'	0	0	1.96
M	1.67	2.31	0
m	0	0	0
その他	11.67	0	15.69

Table 8 場面10における評点カテゴリーの出現率(%)

評点 カテゴリー	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準	$\chi^2$ 検定
E%	44.16	0	82.35	***
I%	42.50	97.69	0	***
M%	1.67	2.31	1.96	
O-D%	20.83	1.54	6.86	***
E-D%	48.33	70.77	77.45	**
N-P%	19.17	27.69	0	***

\*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

に分類してまとめたものである。欲求不満に対する子どもの基本的な解決行動として、母親は一般にはこの場面がひとつの方向に集中するのではなく、外罰方向と内罰方向に大きく2分されるパターンを表明すると見ている。即ち、外罰方向では欲求不満に陥ったことを強調して「暗くてこわかった」「お母さんこわかった」という外罰的障害優位反応E'と、直接に非難・攻撃して「じゃあ、入れなければいいじゃないか」「お母さんのバカ」という外罰的自我防衛反応E、内罰方向では自己批判を伴い「ごめんなさい」「僕が悪かったから仕方がないよ」といった内罰的自我防衛反応Iと、その反応に自発的行動を付加して「今度はもうしないよ」「もう悪いことをしないよ」といった内罰的要求固執反応iである。従って、GCR%に設定され標準法による子どもの多数反応とされるI反応に必ずしも集中するとは言えない。

一方、母親は自分に向けられた欲求不満の解消行動を、反抗や母親自身の防衛反応から外罰方向、殊にE反応へ置き換えられることに敏感であり望まないものである。相対的に、母親は子どもの無意図的で理屈のない謝罪と将来にわたっての約束を求める視点からI反応およびi反応に期待している。場面10で今ひとつ特徴的な点は、母親の話しかけに対して一般的な反応水準と期待しない反応水準に「黙っている」「何も言わない」のように、子どもが無言の状態でいたり、泣くだけやプーンとふくれっ面をして言葉に出さないといった日常経験の記述があったことである。これは評点できないものである。母—子関係では必ずしも子どもが言語反応をするとは限ら

ず、母親の経験から考えてこの現象が一般的な子どもの現実の姿のひとつなのかも知れないが、決して望ましい態度とは考えていないことが示唆される。

#### 場面14

場面14は超自我阻害場面で、子どもが母親から「隠れている理由」を問い詰められている場面である。Table 9は評点因子の出現率を、Table 10は個々の評点を攻撃方向と反応型に分類して

**Table 9** 場面14における  
評点因子の出現率(%)

評点因子	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準
E'	7.35	1.96	1.82
E	19.11	0	69.09
e	0	2.94	1.82
I'	0	0	0
I	2.21	10.78	3.64
i	0	0	0
M'	65.45	68.63	16.36
M	0	1.96	0
m	0	0	0
その他	5.88	13.73	7.27
<u>E</u>	10.29	0	12.73
<u>I</u>	0	0	0
<u>E+I</u>	10.29	0	12.73
<u>E-I</u>	8.82	0	56.36
<u>I-I</u>	2.21	10.78	3.64
<u>M+I</u>	65.45	70.59	16.36

**Table 10** 場面14における評点カテゴリの出現率(%)

評点 カテゴリ	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準	$\chi^2$ 検定
E%	26.46	4.90	72.73	***
I%	2.21	10.78	3.64	
M%	65.45	70.59	16.36	***
O-D%	72.80	70.59	18.18	***
E-D%	21.32	12.74	72.73	***
N-P%	0	2.94	1.82	

\*\*\* $p < .001$

まとめたものである。母親が考える子どもの一般的な反応水準は、無罰方向が中心であるが外罰方向にも出現する。それは、無罰方向では「かくれんぼしている」「遊んでいる」という罪の是認や否定には関係のない単なる状況説明の無罰的障害優位反応 M' のみである。標準法による子どもの多数反応が M' 反応であるという事実を考え合わせると、母親も一致した見方をしていることが明らかである。外罰方向では、自己犠牲の状態を攻撃的に表出する E 反応以上に、「別に何もしていない」といった超自我因子 E 反応が認められる。場面14は、罰を受けた子どもを前提にしているように理解されるが、必ずしもそうは受け取らない場合の存在を意味する。

母親が期待する反応水準の結果から明らかなように、ここでは内罰方向が上昇するが、それらは総て「僕が悪かった。ごめんなさい」といった罰の肯定を示す内罰的自我防衛反応 I である。期待する反応水準ではまた、一般的な反応水準と変わらず M' 反応が目立つが、両反応水準において e 反応と i 反応がほとんど皆無に近いことも象徴的であろう。さらに、期待しない反応水準に出現する e 反応と i 反応の比率を合わせて考える時、母親の立場からすると3水準ともに外罰的にしろ内罰的にしろ要求固執型は意識化されていないと言えそうである。それに対して、母親



が期待しない反応水準は外罰方向、主として「僕の勝手にしょ」「余計なおせっかいだ」「うるさいなあ、あっち行けよ」といった拒否・攻撃を示す外罰的自我防衛反応Eが多い。その他 M' 反応や、詰問による欲求不満を攻撃的に「何もしていない」と強く否認する超自我因子Eも出現する。このような結果から、いずれも子どもの否定的な自己主張は母親から嫌われる要因のひとつであると思われる。

### 場面15

場面15は自我阻害場面で、子どもの「けがの状態」を母親が尋ねている場面である。Table 11は評点因子の出現率を、Table 12は個々の評点を攻撃方向と反応型に分類してまとめたもので

Table 11 場面15における  
評点因子の出現率(%)

評点因子	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準
E'	50.01	12.12	37.50
E	0	0	40.18
e	0	3.03	7.14
I'	42.00	60.60	4.46
I	1.33	10.61	1.79
i	0	6.06	0
M'	5.33	7.58	0
M	0	0	0
m	0	0	0
その他	1.33	0	8.93

Table 12 場面15における評点カテゴリーの出現率(%)

評点 カテゴリー	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準	$\chi^2$ 検定
E%	50.01	15.15	84.82	***
I%	43.33	77.27	6.25	***
M%	5.33	7.58	0	
O-D%	97.34	80.30	41.96	***
E-D%	1.33	10.61	41.96	***
N-P%	0	9.09	7.14	*

\* $p < .05$ , \*\*\* $p < .001$

ある。欲求不満に対する基本的な解決行動として、母親は一般に子どもが外罰方向と内罰方向に2分する形で集中すると考えている。その大部分は外罰的障害優位反応E'と内罰的障害優位反応I'で、無罰的障害優位反応M'を加えると97%以上になり、欲求不満を喚起させた障害をはっきり指摘する反応型をとっている。具体的には、E'反応は欲求不満の表出が母親や特定の人物に向うことを抑え「痛い」「足が痛い」「足から血が出た」と、けがの事実と程度を強調するものであり、I'反応は母親の心配を緩和する内容を含んで「大丈夫だよ」「平気、平気」と、欲求不満状況やけがをしたことを否定する反応である。標準法による子どもの多数反応がI'反応とE'反応にまたがることから、子どもの現実と母親の捉え方が一致していると思われている。

ところが、母親の期待する反応水準は外罰方向ではなく、むしろ内罰方向に求めているようである。また、自分の不注意を肯定して「よそみをしていて落ちたのだから自分が悪い」「もっと階段をよく見ればよかった」と自責を認める反応も増大する。母親は、こういった事態では子ども自身に非があることを認め、しかもそれを前提に母親を安心させる対応の仕方と今後の注意に対する姿勢を強く望んでいる。同時にそれは、欲求不満の誇張と母親や他事への八つ当たりを示すE'反応とE反応の拒否につながるが、ただ単に「痛い、痛い」と泣き叫ぶ(期待しない反応水準

に見られたが評点できない)のではなく、どこが痛いのか、どうすればよいのか等の説明をきちんと求める母親の心理を物語るものであろう。

### 場面16

場面16は自我阻害場面で、母親が「ボールをとった小さい子ども」を非難している場面である。Table 13は評点因子の出現率を、Table 14は個々の評点を攻撃方向と反応型に分類してま

Table 13 場面16における  
評点因子の出現率(%)

評点因子	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準
E'	26.56	0	53.63
E	0	0	3.64
e	21.88	2.34	39.09
I'	0	0	0
I	0	0	0
i	0	0	0
M'	10.94	9.38	1.82
M	34.37	74.22	1.82
m	6.25	14.06	0
その他	0	0	0

Table 14 場面16における評点カテゴリーの出現率(%)

評点 カテゴリー	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準	$\chi^2$ 検定
E%	48.44	2.34	96.36	***
I%	0	0	0	
M%	51.56	97.66	3.64	***
O-D%	37.50	9.38	55.45	***
E-D%	34.37	74.22	5.46	***
N-P%	28.13	16.40	39.09	*

\* $p < .05$ , \*\*\* $p < .001$

とめたものである。欲求不満に対する基本的な対処行動として、母親は一般に子どもが外罰方向と無罰方向に2分される反応水準を取りやすいと見ている。さらに、内罰方向への反応は3水準ともにひとつも出現しない。外罰方向は、「私が遊んでいるのにこの子が取った」「小さいくせに」のように小さい子どもの行動の非が強調されたり母親にその行為を訴える外罰的障害優位反応E'、「早く返してよ」「返すように言ってよ」といった小さい子あるいは母親に最終的な解決を依頼する外罰的要求固執反応eであり、欲求不満状況をもたらした母親を攻撃するE反応は出現しない。無罰方向は、「小さい子をおこらないで、かわいそうでしょう」「私が貸してあげたの」と小さい子どもを明らかに許容するいわば常識的反応ともとれる無罰的自我防衛反応Mが中心で、これはGCR評点に設定されているものであり、標準法による子どもの多数反応として示されているが、全体的に出現率が極端に高いという結果にない。

母親が期待しない反応水準は、圧倒的に外罰方向である。つまり、子どもは一般には欲求不満を自分以外の対象に固定して攻撃することにより、崩れそうな自我を防衛したり防衛の手段を求めたりすると母親には映るが、そうした反応の出現は9割以上が望まれないものといえる。一方、期待する反応水準においてM反応やm反応が高いのは、欲求不満事態を全く不可避的な状況と見なして、小さい子どもを許容する思いやりの気持ちを期待していることを意味すると思われる。

## 場面17

場面17は自我阻害場面で、子どもが「留守番」を母親から要請される場面である。Table 15は評点因子の出現率を、Table 16は個々の評点を攻撃方向と反応型に分類してまとめたものである。

Table 15 場面17における  
評点因子の出現率(%)

評点因子	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準
E'	19.86	1.61	28.57
E	1.37	0	46.43
e	22.60	18.55	24.11
I'	0	0	0
I	0	0	0
i	0	0	0
M'	11.64	1.61	0
M	6.85	25.81	0
m	33.57	52.42	0.89
その他	4.11	0	0

Table 16 場面17における評点カテゴリーの出現率(%)

評点 カテゴリー	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準	$\chi^2$ 検定
E%	43.83	20.16	99.11	***
I%	0	0	0	
M%	52.06	79.84	0.89	***
O-D%	31.50	3.22	28.57	***
E-D%	8.22	25.81	46.43	***
N-P%	56.17	70.97	25.00	***

\*\*\*  $p < .001$

る。母親が認める子どもの一般的な反応水準は、外罰方向と無罰方向にほぼ2分される形で集中し、内罰方向は全く出現しない。外罰方向は要求固執反応eや障害優位反応E'に多く、無罰方向も要求固執反応mや障害優位反応M'に多い。具体的には、e反応は「私も行きたい」という要求主張、E'反応は「つまらない」「1人じゃ淋しい」といった強調、m反応は「はい、わかりました——」のように母親の指示に従い規則を守る反応、M'反応は「どこへ行くの」「何しに行くの」といった欲求不満を軽視して最小限度にとどめようとする反応である。この中のm反応はGCR評点であり標準法による子どもの多数反応であるが、出現率はそれに比較して高くはない。また、この場面ではe反応とm反応は単独評点されるよりも、その大部分はe反応とm反応の組合せから成る「早く帰ってきてね」「おみやげ忘れないでね」という応答から生じたものである。一般的な反応水準では両反応の69%、期待する反応水準ではその52%が組合せ評点による結果であった。

このような一般的反応水準に対して、母親が期待する反応は無罰方向の増加であり外罰方向の減少である。即ち、無罰方向は「はい、わかりました。1人で留守番しています」に代表されるm反応と、「早く帰ってね」のみに出現するe反応との組合せによるm反応である。母親にも解決を要求することになるが、この言葉は母親に受け入れられやすいといえる。相対的に、それは期待しない反応水準には組込まれず「おみやげ買ってきてね」の1例に組合せ評点が認められるだけである。母親が期待しない反応は、その99%以上が外罰方向で、子どもを置いて行く母親を非難するE反応、「私も行きたい」「行かないで」というe反応や上記のE'反応である。これらは、母親の命令に素直に従わない、どちらかといえば我がままな言動と理解されるのであろう。

## 場面19

場面19は超自我阻害場面で、「寝小便」をした子どもが弟と比較されて母親から叱られている場面である。Table 17は評点因子の出現率を、Table 18は個々の評点を攻撃方向と反応型に分

Table 17 場面19における  
評点因子の出現率(%)

評点因子	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準
E'	0	0	0
E	21.21	0	74.54
e	0.76	1.72	0
I'	3.79	7.76	0
I	51.51	43.96	10.91
i	4.55	43.11	0
M'	0	0	0
M	0	0	0
m	0	0	0
その他	18.18	3.45	14.55
<hr/>			
<u>E</u>	3.03	0	7.27
<u>I</u>	28.78	9.48	10.91
<u>E+I</u>	31.81	9.48	18.18
<u>E-E</u>	18.18	0	67.27
<u>I-I</u>	22.73	34.48	0
<u>M+I</u>	28.78	9.48	10.91

Table 18 場面19における評点カテゴリーの出現率(%)

評点 カテゴリー	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準	$\chi^2$ 検定
E%	21.97	1.72	74.54	***
I%	59.85	94.83	10.91	***
M%	0	0	0	
O-D%	3.79	7.76	0	
E-D%	72.72	43.96	85.45	***
N-P%	5.31	44.83	0	***

\*\*\*  $p < .001$

類してまとめたものである。子どもの欲求不満解決行動として、母親は一般には内罰方向と外罰方向に反応が及ぶと見ている。内罰方向は大部分が自我防衛反応に集中して出現するが、その反応はI反応および超自我因子I反応にほぼ2分される。即ち、前者は自分の過失を素直に認めて「ごめんなさい」と謝罪する反応語で、これ以外は存在しなかった。後者は「間に合わなかったから」「夢を見ていたから」など、自分の非を認めながらも自己弁解を付加するものである。この両者を加えた内罰的自我防衛反応はGCR評点であり、標準法による子どもの多数反応でもある。外罰方向は「ガミガミ言わないでよ」「すぐ僕ばかり怒る」「仕方ないだろう」と母親を非難するE反応が多く、攻撃的に否定する超自我因子E反応は少ない。

母親が期待する反応水準は内罰方向に集中するが、個々の評点には変化が認められる。即ち、E反応およびE反応がゼロになったこと、I反応が減少したことと対照して、I反応の増加とi反応の急増である。これは、母親にとって色々な言い訳をする子どもを好ましく思わず、言い訳をせずに素直に謝るか「もうしません」「今度から気をつけます」と、以後の自発的努力を決意する子どもを望んでいることを意味する。母親の期待する反応水準が期待しない反応水準の結果からも裏付けされることは明らかである。場面19で今ひとつ特徴的な事柄は、場面10と同様に、子どもが「何も言わない」「泣く」「いじける」といったいわば消極的態度をとるという記述が目立った点である。これも場面設定を考慮すると、現実の子ども像では散見される現象と思われる

る。

**場面23**

場面23は自我阻害場面で、母親が「おつゆが冷めてしまった」ことを子どもに詫びている場面である。Table 19は評点因子の出現率を、Table 20は個々の評点を攻撃方向と反応型に分類し

**Table 19 場面23における  
評点因子の出現率(%)**

評点因子	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準
E'	3.13	0	8.93
E	4.69	0.91	68.74
e	20.31	21.82	20.54
I'	18.75	20.00	0
I	1.56	4.55	0
i	3.13	20.00	0
M'	9.38	5.45	0
M	32.79	16.36	1.79
m	3.13	10.91	0
その他	3.13	0	0

**Table 20 場面23における評点カテゴリーの出現率(%)**

評点 カテゴリー	一般的な 反応水準	期待する 反応水準	期待しない 反応水準	$\chi^2$ 検定
E %	28.13	22.73	98.21	***
I %	23.44	44.55	0	***
M %	45.30	32.72	1.79	***
O-D %	31.26	25.45	8.93	*
E-D %	39.04	21.82	70.53	***
N-P %	26.57	52.73	20.54	***

\* $p < .05$ , \*\*\* $p < .001$

てまとめたものである。欲求不満に対する母親から見た子どもの一般的な反応水準は、他の場面と相違してすべての評点因子に出現した。出現順位から調べると、無罰方向では「お母さん、いいよ」のように母親の勝手な許容する自我防衛反応M、外罰方向ではその解決を母親に強要し「もう1度あたためてよ」「早くあたためてよ」のような形をとる要求固執反応e、内罰方向では「いいよ、温いと飲めないから」「冷めたいのが好き」といった、欲求不満事態が却って自分に好都合であることを強調する障害優位反応I'が多い。M反応率が比較的高いものの積極的に大きな差異ではない。このような母親の見方は、標準法による子どもの多数反応に一定の傾向が認められないことと一致する。

一方、母親が期待する反応水準は、出現順位は異なるが3方向に認められる。最も出現の高い内罰方向は、I'反応と「僕があたためてくる」に代表される償いのi反応が同率で、自己非難のI反応は極めて少ない。無罰方向はM反応の減少と「我慢」するm反応の増加である。外罰方向は、e反応が一般的な反応水準と変わらずに出現し、これは期待しない反応水準に継続する。ただし、この場合は「あたためてこい」のように、同一評点でも語尾に不快感を思わせる反応語が含まれる点に特徴がある。同時に、期待しない反応水準では「こんなの飲まないよ」「いつもそうなんだから」「お母さんは気が利かないわね」というE反応を中心に外罰方向が圧倒的に多い。母親が好まない反応は1方向に集中するが、他の2水準はバラエティに富むようである。

## 要 約

本研究は、Rosenzweig の P-F スタディ児童用の中から選択された母—子場面を材料に、反応の水準を母親の子どもに対する役割期待という観点から 3 方向に求めた。即ち、子どもの欲求不満解決行動における一般的な反応水準、母親が期待する反応水準、母親が期待しない反応水準である。得られた主要な結果は以下の通りである。

- (1) 特定の評点因子が、3 反応水準ともに出現しない場面が認められた。
- (2) 特定の攻撃方向が、3 反応水準ともに出現しない場面が認められた。
- (3) 攻撃方向および反応型から、子どもの一般的な反応と、母親の子どもに対する役割期待との関係が明らかになった。
- (4) 理論上は同一評点に分類されるが、3 反応水準に分かれる反応語が認められた。
- (5) 欲求不満事態では、必ずしも子どもが言語反応をするとは限らない事実が認められた。

このような諸結果から、標準法による子どもの反応と、母親の具体的な子ども像とは一致する傾向にあることが確められた。また、役割期待の観点からは、概して母親に好まれる方向は内罰あるいは無罰的反応であり、外罰的反応は好まれないことが明らかになった。こうした具体的事実は、P-F スタディを標準法にて実施する際の基本的態度の必要性の指摘（林，1985）とともに、臨床的に利用する場合において重要な知見を提供するものと思われる。

### 引用文献

- 藤田主一・高橋秀和 1984 P-F スタディの基礎的過程に関する研究 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 454-455.
- 藤田主一・高橋秀和 1985 P-F スタディの場面展開性に関する研究——(4)児童用場面 6, 場面 8 の分析——日本心理学会第49回大会発表論文集, 442.
- 原野広太郎・江川玟成・渡辺三枝子 1970 P-F スタディによる児童の教師観の研究 相談学研究, 4, 1, 1-7.
- 秦一士 1974 P-F Study における児童の人物認知と言語反応の関係 日本心理学会第38回大会発表論文集, 510-511.
- 秦一士 1981 P-F Study (児童用) 場面の分析 教育心理学研究, 29, 3, 69-73.
- 林勝造 1985 ローゼンツァイク P-F スタディ 精神科 MOOK No.10 心理検査法 金原出版, 77-88.
- 一谷彊・林勝造 1976 投影法の基礎的研究—Rosenzweig P-F Study を中心として—, 風間書房.
- 住田勝美・林勝造・一谷彊 1964 a ローゼンツァイク人格理論, 三京房.
- 住田勝美・林勝造・一谷彊 1964 b 改訂版ローゼンツァイク P-F スタディ使用手引, 三京房.
- 高橋秀和・藤田主一 1985 P-F スタディの場面展開性に関する研究——(3)児童用場面 5, 場面13の分析——日本心理学会第49回大会発表論文集, 441.